

特集

パンデミックは終わっていない

# インフルエンザ文明論

黒川清

政策研究大学院大学教授

ホモサピエンスが地球上に登場した

のが十五万年前のことである。それ以来、飢餓や伝染病、風土病といった人類の生存を脅かす障害を、営々として克服しながら、われらが祖先たちは生き永らえて来た。食料事情をひとまず置けば、人類が直面してきた最大の難敵は、「感染症」だったことに間違いない。

これから先も引き続き人間を脅かし続けるだろう感染症だが、近年とくに目立つようになってきた新種のインフルエンザ流行は、現代文明が大きな曲がり角に立っている警鐘とも受け取る

ことができる。

今年に入って世界を騒がせた新型コロナウイルスもまた、人類を脅かしてきた感染症のひとつである。パンデミックが、今そこにある危機として読者諸賢に意識されている現状でなら、文

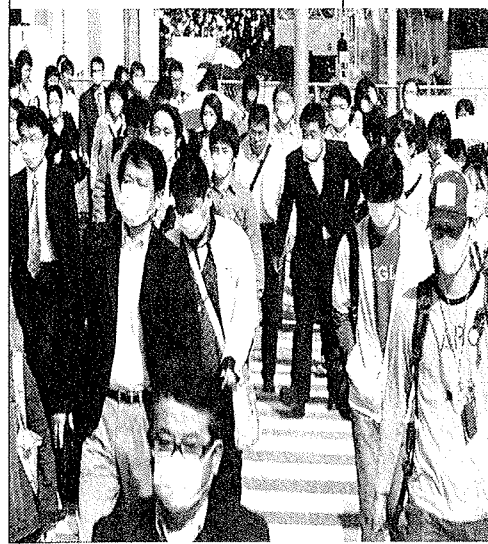
明論として感染症を語る意義もまた少なくないだろう。私の、そしてあなたの祖先たちが闘った生存への「戦史」でもある。まずは有史以来の伝染病との関わりから、話を進めてみよう。

## 文明と感染症

気の遠くなるような遙か昔、約七百

万年前に猿から分岐した人類の祖先は、最終氷河期の終る約一万三千年前に、いくつかの地域で村落生活を始めていた。シベリアからアリューシャン列島を渡ってアラスカに上陸したモンゴロイドが、アメリカ大陸に足を踏み入れたのもちようどこの時期に当たる。アフリカ大陸に産声を上げた人類は、こうして大いなる旅人となって各大陸にあまねく進出し、その分布を完了していったのである。

私たちが、「世界史」の授業で学んだナイル、チグリス・ユーフラテス、インダス、黄河という「四大河川」の



畔に生まれる文明は、もうすぐそこま  
で来ている。文明誕生前夜のことだ。

一万年前には狩猟と並行して農業が  
開始され、数千年前から文明が徐々に  
生まれ、形作られる。集落に定住した  
人間が、食料の安定的な生産を始めて  
飢餓の心配からは次第に解放されはし  
たが、一方で疾病による突然の死から  
は逃れられなかった。不思議なことに  
同じ症状が流行蔓延して命を奪われる  
のは、大体が子供なのだった。これが  
インフルエンザなどの動物からの感染  
症の仕業と知られるまでには、ここか  
らまた途方もない時間を要する。

ヨーロッパで、もつとも早い時期の  
文献に現れる記述には、「インフルエ  
ンザは、東の国の方からやって来た」  
と書かれている。ユーラシア大陸の東  
側では、中国が最初に豚を家畜として  
飼うようになった。おそらく、インフ  
ルエンザは豚を介して西へ西へと運ば  
れてきたのだろう。

文明は、栄枯と消長とを繰り返しな

がら、やがて「国家」を生み、国境線  
が引かれ、衝突と融合が繰り返されて、  
結局、旧大陸にいた民族、主にヨーロ  
ッパ人が、新大陸（南北アメリカ大  
陸）を含む「ほぼ全世界」を経済的に  
支配していくことになる。いわば「近  
代」誕生までの揺籃期に当たる。

スペインとポルトガルは、南米大陸  
に花開いていた文明を、「銃」と「鉄  
の道具」で完膚なきまでに侵略殺戮し、  
その支配下に置いて植民地化した。誰  
もが知る帝国主義による歴史の幕開け  
である。

ここで一般に見落とされがちなのが、  
「病原菌」の世界史に果たした役割で  
ある。ときには顕微鏡でも見えない彼  
らが世界史の重要な展開に一役買った  
という事実は興味深いが、それほど語  
られていない。

そう、文明と感染症には深い連鎖が  
あったのだ。先ごろ亡くなったアメリ  
カの政治学者サミュエル・P・ハンテ  
ントンの代表作に『文明の衝突』が

ある。冷戦後の現代社会での文明の衝  
突は、宗教などアイデンティティの在  
り処をめぐるものだが、五百年前には  
病原菌と人間とのクラッシュが現実だ  
った。

その好例が、ピサロのインカ帝国征  
服の裏に潜む感染症のエピソードであ  
る。

アメリカ大陸のモンゴロイド系原住  
民と最初に接触した旧世界のヨーロッ  
パ人は、一四九二年カリブ諸島を発見  
したコロンブスだった。彼は、まだし  
も紳士的な冒険家で、その後の南アメ  
リカ大陸におけるスペイン人のように  
膨大な流血をもって「永続的な支配」  
を企てる意思は持たなかった。

一五三二年十一月十六日、ヨーロッ  
パ人とアメリカ先住民の間で苛烈な衝  
突が起こる。スペイン人のピサロが、  
インカ帝国をわずか一日の戦闘で征服  
してしまったのである。インカ皇帝ア  
タワルパは、王位をめぐる内戦に勝利

したばかりだった。八万人の屈強な兵士を率いていた。対するピサロは神聖ローマ帝国カール五世（同時にスペイン国王カルロス一世）を戴くヨーロッパ最強の君主国の臣下ではあるが、手兵は百六十八人にすぎなかった。

ピサロは、ペルー北部の高地カハマルカで、皇帝アタワルパと会談を始めた数分後には人質にして捕らえてしまふ。身代金として信じられないほど大量の金をせしめた後、皇帝を処刑し戦端を開く。二百人足らずのスペイン人兵士が、七千人から八千人のインディオを惨殺したというから驚くではないか。

この戦いを歴史家は様々に評価してきた。いわく、銃と鉄器と騎馬の戦闘能力が、数で圧倒的なインカ兵を制圧した。銃の発砲音、ラツパの騒音、見たこともない動物だった馬への恐怖が衝撃となってインディオは闘いもせず逃げ惑った。インカの人々がピサロのことをビラコチャ神の再来と間違え

た、などと主張する専門家までいる。

いずれも一理あるかもしれないが、この当時、銃と言っても実は火縄銃で装填には時間がかかるし、所持していたのは、たったの十二丁。馬に乗った騎兵、これもたったの六十人。もちろん、剣や槍などの鉄製の武器は、インディオが持つ棍棒に比べて殺傷力は抜群だったろう。

だが、最大の要因は他に見つけられない。伝染病と免疫力だ。実はインカ帝国は後継者をめぐる争いで内戦が続き疲弊していたのだ。そして、この内戦の引き金になったのが、一足先にパナマとコロンビアに移住していたスペイン人が持ち込んだ「天然痘」という伝染病だった。

当時、インディオの間で天然痘という強力な感染症が大流行し、一五二六年インカ皇帝カパックが死去、後継者クヨチもすぐに天然痘で逝去、多くの臣民も亡くなっていった。王位をめぐってアタワルパと異母兄弟のワスカル

が対立し、内戦になった。ピサロが新大陸に上陸する直前のことだった。もし、天然痘が旧大陸から運び込まれなければ、ピサロは一枚岩の強大なインカ帝国軍と戦う破目に陥っていたはずだ。新大陸の歴史は違う方向に流れたかもしれない。

天然痘だけではない。チフス、ペスト、そしてインフルエンザなどの伝染病が陰の世界史で演ずる役割は、いくつかのポイントできわめて重大な結果を招いているのだ。

アステカ帝国もスペイン軍との戦いには抵抗したが、天然痘には免疫力を持たなかったので破れ去っていった。実際、ヨーロッパ人が版図を拡大するスピードよりも速く、感染症は新大陸に蔓延していった。新大陸の先住民はユーラシア大陸とは絶縁状態だったから、ヨーロッパの風土病・伝染病にまったく免疫がなかったのである。銃ではなく病原菌が、南北アメリカ大陸から先住民族の九五パーセントの命を消

し去っている歴史的事実は、あまり知られていない。

この他、ヨーロッパ人が移動した先では、南アフリカ先住民（一七二三年）、オーストラリア先住民にも同じ運命が待ち受けていた（一七八八年）。彼らはこの地上から消え去っているか大幅に減少している。太平洋上では、一八〇六年にフィジー諸島で起こった疫病の大流行がある。

逆のケースとして、コロンブスは、新大陸から「梅毒」という感染症をヨーロッパに持ち帰っている。江戸時代の日本にも「花柳病」として蔓延した。

世界史における文明の衝突の帰趨には、感染症に免疫のある民族が免疫のない民族に伝染病をうつした結果、文明史に大きな影響をおよぼすケースのあることがお分かりいただけだろう。

## 死に逝く子供

人類がこの世に登場してから、人間の闘いは究極的に二つのことであり続

けた。先述したように、「飢え」と「感染症」である。

この事実には、一億年前も現在も基本的に変わりはない。サバイバルしていただくためには、人間と動物であることに違いはないので、常に「リプロデュース」して生き延びねばならない。このときにいちばんの障害は病気で死ぬことだったのである。

古から経験則では、「いつか自分も死ぬ」ということを皆、他者の死を見て知っている。他方で日常の疾病については、たとえそれが「死に至る病」であっても、定められた運命、「寿命」という認識で受け容れることも可能だったはずだ。しかし、問題は、突如なんの前触れもなく子供たちが死に逝く事態だった。とつぜん、何がなんだか訳も分からずに死んでゆく子供を前にして、大人たちが受けた衝撃は、計り知れないものだったろう。これが感染症なのだが、我々の祖先には知る由もなかった。

これまで様々な伝染病が現れてきたが、なかでも猛威を振るったのが「天然痘」だった。一人罹患したが最後、もの凄いの勢いで拡がっていく。町が丸ごと壊滅状態になり、子供は半数が死亡した例も珍しくはなかった。

天然痘は、一度罹ると免疫が出来て二度と罹らない。誰にでも分かる症状が出て、生き残った人の顔は痘痕<sup>あばた</sup>になる。子供はバタバタと死んでいく悲惨な状況。こうしたなにかの「経験則」で人々はこの病に一定のイメージは持っていたが、原因はなにも分からない。

ジェンナーが「種痘」を始めたのが十八世紀の終わり、これが画期的なことだった。ジェンナーは、牛の乳絞りに人は、天然痘で死ぬ者がいないことに気付いたのである。さらに、その子供にも天然痘に罹る者は見当たらなかった。牛が罹る「牛痘」は知られていたものでこれだと思つて、八歳の少年にその膿を植え付けるといふ実験を企

てた。人間の種痘を植え付けると死んでしまうが、牛痘で試みたところが素晴らしい閃きだった。これが上手いきき、ヨーロッパ中に広まっていく。

ジェンナーの考案したワクチンが天然痘に効くという情報は、たちどころにユーラシア大陸の端にまで伝播した。陸上ルートと海上ルートから、極東日本へも伝えられる。

ときあたかも徳川全盛の江戸中期。日本でも石を投げると痘痕面にぶつかるほど、天然痘はポピュラーな伝染病だった。鎖国していた日本に、西洋文化は長崎の「出島」から入ってくる。偉かったのは佐賀藩の藩主だった。「あれは天然痘に良さそうであるから、研究してうちでやってみよ」というお達しが出る。さっそく御典医が動くことになった。それが成功して、長崎大学の熱帯医学研究所の母体となっている。

ようやく、それが**細菌**、病原菌のせいだと分かってきたのが、十九世紀も

終わりに近づいた頃だった。パスツールやコッホ、日本人の北里柴三郎らの研究によって、病原菌の存在が明らかにされたのである。

人類はそのようにして感染症との闘いを知恵比べしながら続けてきた。

地球の人口は、有史以来、増え続けてきた。過去十年より人口が減少した例はただ一度だけ。十四世紀の半ば、ペスト（黒死病）でヨーロッパの人口が三分の一になったときだけなのだ。

二千年前にはようやく二、三億人だった人口が五億人に、つまり二倍になるのに千五百年を要している。レオナルド・ダ・ヴィンチが『最後の晩餐』を描いた頃には、世界人口は約五億人になっていた。

百年前に十六億人という規模に膨らんだが、これは四世代前のことである。一九六〇年には約二倍の三十億人になった。そして、現在は六十四億人。

この百年間に世界の人口が四倍に膨らんだわけだ。エネルギーの需要、食

料や水の需要が急激に増え、それが地球環境に与える影響は非常に大きくなっている。

人口の爆発がもたらしたこうした問題に対してどう対処すべきかを真剣に考える必要性に迫られている。医療が進み、衛生観念が広く行き渡った結果、大幅な寿命の伸長が達成されて世界人口が極大化した。人間が増えてくると、活動範囲が広がって行くから、どうしてもそれまで人間が足を踏み込まなかった領域に入ることになる。森を切り開いていくと、どうしても動物に感染している病原菌と出会うことにもなる。病原菌を持っている動物には無害でも人間には有害な病気はいくらでもある。蚤のみによって媒介されるペストもそのひとつである。蚤はネズミに寄生して、ネズミは人間の暮らす家に入り込む。

### 突然変異する病原菌

古代ローマの時代、人間の平均寿命は二十五歳だった。だからカエサルも

アウグストゥスも長寿を全うしたと言  
っても、あながち間違いではないろう。  
百年前にはアメリカ、日本で寿命は四  
十〜四十五歳くらいになった。千八百  
年かけてようやく十五年寿命が延びた  
ことになる。それから更に百年が経っ  
て、アメリカと日本では平均寿命が八  
十歳に届いた。二倍になるのに百年し  
かかかっていない。これは、驚くべき  
スピード変化なのである。

これだけの人間を食べさせていく食  
料生産力は、地球にはない。もはや限  
界に達している。生活水準の上だった  
中国やインドで中産階級化しアッパ  
ークラスの仲間入りした人々が欧米人と

同じ食生活を始めている。より良いラ  
イフスタイルの追求は次第に裾野に向  
かって拡がっていく。昨今の「鳥」  
「牛」「豚」にインフルエンザなどの感  
染症が拡がりを見せているのは、需要  
に因應べく、無理に無理を重ねた生  
産体制を敷いている結果ともいえる。

劣悪な環境下、抗生物質まみれの餌  
を食べて育った食肉用家畜の体内に宿  
っていた病原菌が、しだいに耐性を増  
して突然変異することは日常的に起こ  
りえる。いかにも感染症が制圧され  
かのように、今では思われている節が  
ある。なにより栄養状態が格段に良  
くなり体力が向上した。ペニシリン、ス

トレプトマイシンなどの抗生物質も発  
明され、結核など昔話のように思われ  
ているが、事実はそうではない。昨今  
の結核による死亡者の急増は、感染症  
との闘いが人類の永遠のテーマである  
ことを如実に語っている。初期段階か  
ら抗生物質を使いすぎる傾向が、人間  
の体力を上回る耐性を備えた結核菌を  
生み出しているのだ。

アメリカで最も信頼され、普及して  
いる内科の教科書、ハリソンに占める  
「感染症」の項目の分量は、驚くなが  
れ全体の二十五パーセントにも上って  
いる。それくらい、重きを置かれてい  
るテーマなのである。

## 「失敗しない」と言う失敗

今回の新型インフルエンザ（豚インフルエンザ）で感染した人は、国内で四百人、世界では二万人を超えている。旅客機による輸送力、移動に要する時間が大股で進歩する時代に、島国根性まる出しの「水際作戦」など、笑止千万としか言いようがない。鎖国でもしているつもりなのだろうか。

国会でも、女性検疫官が、「検疫官が成田空港で防護服を着て走り回る絵は、一般受けはしたかもしれないが、たんなるパフォーマンスに過ぎず、政治利用されたと思えない。入ってきた保菌者の対応はその分、手薄になった」と政府・厚労省の痛いところをズバリと衝いていた。

私は、こうした声を隠蔽せずに公開すべきと思っているし、新型インフルエンザについて採られた膨大なデータは、すべてネット上に公開し、世界中あらゆる研究者が分析可能のように取

り計らうべきだと言ってきた。厚労省が分析しようにも、人手の問題もあり無理なことは分かっている。だから、データをアップデータして、信頼の厚いCDC（米疾病予防管理センター）に提供すればよいのである。情報がこれだけフラット化した時代、黙っていても世界中で分析される。アメリカの凄さは、こうしたデータが全てオープンになっていく点にも覗える。こうした透明性こそが、グローバル・スタンダードを創りだす基礎的要件なのだ。

翻って日本はどうか。御用学者が、厚生労働省と結託して、一つの価値観を押し付けてくる。それで日本発のグローバル・スタンダードを作りたいなどとぬかす始末だ。おこがましいにも程がある。メディアにも問題はある。記者クラブで得られる情報など横並びの決まり文句が異口同音に繰り返される。毎日毎日、今日は三百人、今日は三百十四人と感染者数をカウントすることが報道の名に値するものなのか。

一方で国民の方も思考停止に陥っている。自ら判断する能力をどこかに置き忘れてきてしまっているのだ。インフルエンザへの対処法についての判断は、厚労省など、まったくのお上任せ。お上の判断が間違えば、文句だけは言う子供っぽい風潮が蔓延している。役人にも同情の余地は残る。

いつしか日本人の危機感とは、ことが起こるとすぐに「役所のせいだ！」と非難の声をあげる類の薄っぺらな「茶の間の正義」に墮してしまった。責任を押し付けられる役人も当然それではたまらないから、過剰防衛に走ることになる。アライバイとしてのマニュアル作りに血道をあげるのだ。

記者クラブ発の「水際作戦」をメディアが鵜呑みにして、違った意見など紹介しないから、国民も「水際でとめろ」となる。厚労省はできもしないと分かっているながら「最後の一人まで」と安請け合ひして墓穴を掘る。その頃にはマスコミが一転、また右倣えして

「役所はやりすぎだった」と声を揃える始末である。

あのマスク騒動にも顕著なように、なにかという過剰反応しすぎなもの、一種の国民性に由来するものかもしれない。役所が「マスクをしろ」というと、なんの自主的判断もなくむやみに励行する。我々を取り巻くのはネット社会である。新聞・テレビから離れて信頼性の高い媒体情報はいくらでも調べられる。WHO、CDCからグーグルまで、リアルなデータが出ているし、世界のインフルエンザ対策も知ることは可能である。五月初めには「微毒性」と分かっていたのだから、まっとうな情報に接した人間なら、マスクな

うな情報に接した人間なら、マスクなど買い込んではいないだろう。政府も方向転換には敏感になるべきだ。なぜ「間違っていました。マスクなんて無意味です」とアナウンスできなかったのだろう。

今回の新型インフルエンザに政府が取った内向き思考回路の対応策で、国民は「とにかく恐ろしいくらい何も考えていない」という現実を肌身で感じ取ったはずである。パンデミックへの危機管理体制が不十分なことは関係者の右往左往ぶりからも明らかになった。不幸中の幸いは強毒性のインフルではなかったことだ。だが秋から冬に第

二波、第三波が再び猛威を振るわないとも限らない。過去の例では、一九一八年〜二〇年に大流行した「スペインかぜ」がそうだった。結局、日本だけでも四十五万人の死者が出た。関東大震災の四倍以上の犠牲者である。

今回露呈した様々な失敗は、役所が「失敗しない」という嘘をついていたことに起因する。失敗してもいいのである。そこから分析が始まる。その失敗をどう生かすかが大事なことなのだ。「賢者は歴史に学び、愚者は経験からしか学ばない」  
我々はこの格言を今、肝に銘じておく必要がある。  
(くろかわ きよし)